

# 崋山と毛武游記

## 渡辺崋山の人物像

三河田原藩藩士(1793~1841)。  
田原藩は渥美半島付け根に  
位置する1万2千石の小藩。



崋山の人物像を要約すると、

- 江戸詰の藩士として生涯のほとんどを、江戸城近くの三宅坂藩邸内で過ごす。
- 高志、清廉、孝養心の厚い武士として生きた。40代より藩家老としての手腕を奮う。
- 学者としても傑出している。儒学に加えやはり40代より本腰を入れて蘭学・洋学に傾倒する。
- 画家としても超一流。特に肖像画に優れ、「鷹見泉石像」は最高の傑作とされ国宝に指定される。
- 俳諧、和歌、漢詩にも通じ、「南総里見八犬伝」作者の滝沢馬琴親子とも親しい。「毛武游記」に見られるようにリズム感ある文章にも秀でている。
- 酒好きで人と議論することも好み、相手の身分にこだわらず多くの人と交遊した。
- 内剛外柔型の温和な性格でかつ人間的包容力が大きい。
- 海外事情に通じていたために幕府の硬直した鎖国政策を憂慮した。そのため「蚕士の獄」に連座し、最期は武士道に殉じて切腹し、49歳の生涯を閉じた。

江戸幕末期における時代に目覚めた先覚者である。

## 桐生滞在の日程要約

崋山は10月12日の夜遅く桐生新町の岩本家(妹茂登の嫁さ先)に着いています。桐生新町二丁目にあった岩本家を拠点にして活動するのですが、桐生だけでなく精力的にその周辺に足を伸ばしています。この月の月末までが毛武游記に記録されていますが、崋山は11月5日まで滞在し、6日に次の調査地・熊谷付近の三ヶ尻へ旅立っています。

### 10月16日

大間々の要害山・高津戸を歩く。  
渡良瀬川第一の景勝地である要害山と高津戸峽を見せたいと、岩本茂兵衛が崋山を案内した。ついでに、自らの生家(堤村の谷家)と養い親(天王宿の今泉家)も訪れた。

### 10月29日~30日

1泊2日の日程で利根川を越えて  
筋小屋の書画会へ出掛ける。  
足利の代官・岡田東塲が崋山を誘ったものである。崋山は桐生の次の旅である深谷・三ヶ尻調査の便宜と轉旋を東塲に依頼していたが、それに応える目的があった。

### 10月13日

四方山話で一日を過ごす。多くの人があいさつに訪れる。

### 10月14日~15日

岩本家の墓参り、美和神社から雷電山散歩する。

### 10月17日~20日

多くの桐生の人たちと交流する。雨のため根本山登山中止。

### 10月24日

終日絵画を描いて過ごす。

### 10月25日~28日

桐生文化人と交流、桐生のまち中を散歩、織物の調査など。



# 崋山と歩く要害山と高津戸峽

## 大間々の町図(これは足利の町図でした)



「此あたりは大間々として昔は村なりけるが今は人家稠密になりて機織りをもはらとす。月六たび絹糸の市をなし、遠き村よりも人いりつひて終に上にも村とは称さずして町とは申せしとぞ。街凡十町あまり家六七百戸にあまりぬらん」

## 高津戸はね滝



「又此川にそいて行、神明の古祠あり、これなん此わりの生土神といふ。社後、崖をとり木の根につきて深に下ればはね滝といふ。又渡瀬川の upstream にて水石せかれて瀑をなす、よりにかく呼なるべし。夏の程は香魚下流より登りこの滝を越えんとし飛びあがるを、石に坐て網をさし出せばあやまつて其中に落ちるを取。一時数百尾まことに愉快なることぞ。道了権現に調し茶店に飲す」

## 高津戸の渡し



「山間木業をふみてくれば渡しありといふ。川の真中に綱引き渡し此綱をかじりとして棹を用いず。これまた渡瀬川なり。左さまより巖壁て上はただ松暗きばかりに生ひしげり、中に葉葉の打ちまじりたるいとあわれなり」



## 手振山と赤城山(要害山近くより)



## 要害山より望む赤城山



「今は要害山とて上八幡(金毘羅)社あり、社の後に大きな石半地に入りていとゆえゆしく、しめなど打ちかけて名(空字)といふ。山下は渡良瀬川の水上に左右巖壁ひ出て河中に横立す。いはばものふ剣もて戦ふ如く、急流これにせかれて百千の玉となり瑠璃なせる水と照り合ふさま筆にも詞にも及ぶまじ」

## 大間々の歴史一ロメ

大間々の「間々」とは崖の意である。渡良瀬川が削った崖の上に町がある。生糸や絹織物の集積地であり、足尾銅山から江戸へ銅を運ぶ「銅(あかかぬ)街道」の要衝でもあった。

# 華山と歩く足利

## 小侯の山木屋

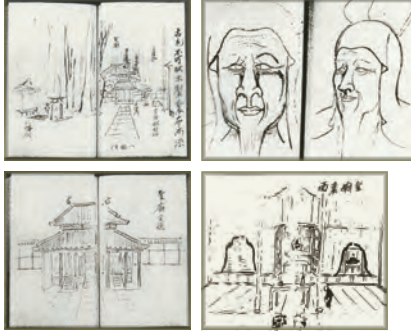


「この村町あり、瓦葺相まはしり長さ三町もあるべし。街の真中清水流、皆水を車もて家に引糸を繰る。また車に小桶をつけて水をくませなど大に人力にかかわる。山木屋という酒店に小酌、肴なし、たづの子、さんまのみ。ポクリツカケ」

## ポクリツカケ(黒皮茸)



## 足利学校



「聖廟にいたる。廟は前に門あり、右左皆ついでうちがこみ(塀囲いされ)、むかひて右の方に小門あり、これより廟に詣す。此日院僧用ありとていで来たらす。岡田立助はちかきわたりの人なればうちたのみて帳を開き札をあつくなしおしえ。立助先立ちて我輩あとにつきて門を入れば聖廟」

## 孔子座像、座像下秘文



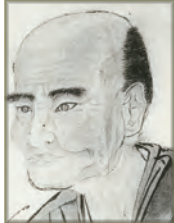
華山は秘文を読み取って記録した。

## 葉鹿の酒飯店にて



「葉鹿村に出、民家二戸一は糖果生果をうる。又うるかひさく、一は酒販あり、この家岩本氏が事を知り、予が其妻の兄とき、妹の貞操を称す、心喜よるこぶ」

## 文人代官岡田東鳩



「それは如此々と語りければ、岡田氏大驚き、今夕にして君あるをり又此大活眼あるをりたり。さりとは我ための吉人なるかなとてたがひに論議蝶々として終に夜明けたり」

岡田東鳩(立助) 丹南藩足利領4ヶ村の代官。学問を好み、江戸で学んだ秀才で長崎や京都にも遊学した知識人。絵画にも通じていたため、徹夜で画論を交わし、華山がもっとも信頼を寄せた人物。東鳩は華山を前小屋の書画会に誘い、武州三ヶ尻の調査にもいろいろと便宜をはかってくれた。昌庵、蘭溪、東鳩も華山と会った数年内に亡くなっている。文字通り一期一会の出会いと縁だった。



## 足利の歴史一ロメモ

足利氏の荘園として発展してきた。ばん阿寺は足利将軍ゆかりの氏寺である。足利には三つの日本一があると云われる。足利学校・フラワーパークの藤・栗田美術館の伊万里焼である。かつては銘仙の織物産地でもあった。

## 生品の森



「この森は生品明神のおはせばかくはいふ。此もり本草きりれば必病を得るとてたれ手をつくるものなし。秋は茸出る。往來の人もしあやまりてとり喰う事あれば、あしとて此村より札をたて人にしめすとぞ。此森を通れば田間に牛の塔あり」

## 尾島の豪農

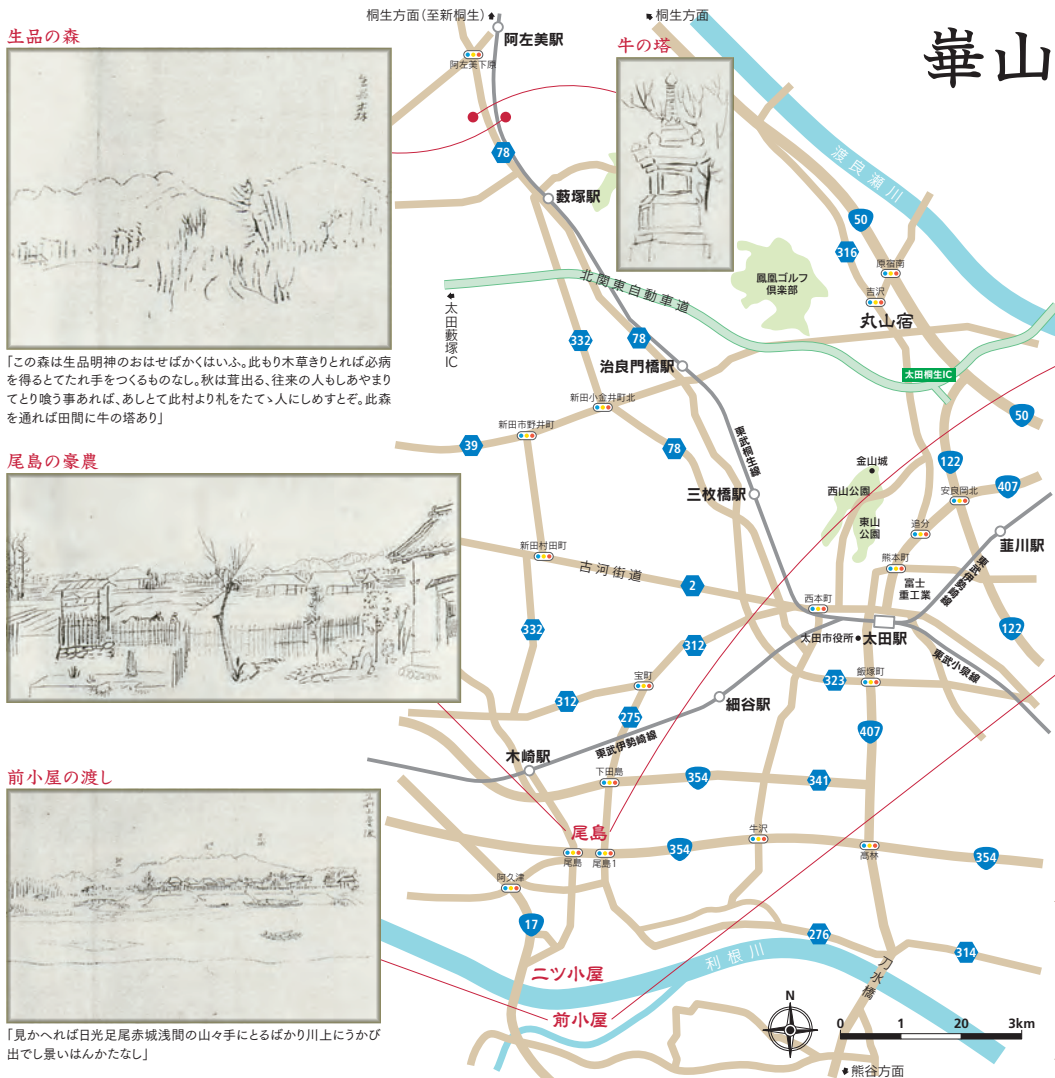


## 前小屋の渡し

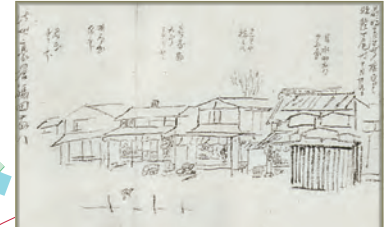


「見かへれば日光足尾赤城浅間の山々手にとるばかり川上うかび出でし景いはんかたなし」

# 華山と歩く新田と太田



## 尾島の商家



「尾島は人屋相連り駅の如し。戸数凡二三百軒瓦づりも打まじり、そば、酒、もち、めし等をうる家三軒ばかりありぬらん。又治りやども三軒ほど見ゆ。これは市場にて夏にいたれば糸ありて近郷よりいり来るとぞ」

## 前小屋天神



一日の労働が終わって農民の集まる書画会に華山は興を覚え、腕の続く限り絵を描いた。華山は人々の意気に感じる人であった。

「この処は前小屋天神とてむかしは川のあななたなる尾島にそびたる地なりしが、洪水の後、川の瀬かはり今は川の南になりていとわびしき地なりき」

金井烏洲 伊勢崎尾島村の画家。華山とは旧知の間柄である。前小屋の書画会で同席する。華山は「真に自分の絵を評価できるのは東鳩と烏洲だけだ」と言っている。

## 新田・太田の歴史一ロメモ

「新田荘を開いた源氏の直系新田義重を祖とし、鎌倉幕府を倒した新田義貞を輩出した。この新田家は徳川家康の祖とされ、徳川家との縁が深く、尾島の世良田には東照宮がある。江戸時代には、太田金山で採れた松茸が毎年江戸の将軍家へ献上されたことで知られる。